（第3種郵便物認可）　福井新聞　2025年（令和7年）5月10日（土曜日）　経済 6

高度外国人材に熱視線

県内企業 海外展開にらみ

専門技術や知識豊富 〝即戦力〟期待

――新卒獲得競争激化も背景

2026年卒業予定の大学生・大学院生を対象にした新卒の採用活動が本格化する中、県内では日本の大学を卒業見込みの外国人留学生にも注目が集まっている。人材獲得競争が激しくなる中、企業の多様性や世界とのつながりをもたらす外国人材に活路を見いだそうと、専門的な技術力や知識を持つ〝即戦力〟として熱視線が注がれる。（黒田美紗）

高度外国人材の県内定着を目指し、県内事業者と人材の橋渡し役を担う「FUKUI外国人材受入サポートセンター」が昨年7月開設された。同センターが3月にオンラインで実施した県内企業の合同説明会には製造や小売り、商社など多種多様な49社が参加。同センターは「外国人材の将来性にかけている企業が多い」としている。留学生は全国の大学から延べ237人が参加した。

福井新聞社が県内主要67社に実施した新卒採用アンケートでは、外国人を雇用している、したい理由に「専門的知識」を挙げたのは昨年が全体の22・9％だったのに対し、今年は52・8％となり、高度な知識を持つ即戦力としての期待が高まっている。同センターが県内企業の経営者協会と実施したアンケートでも外国人の採用に関し、4割以上が「将来は拡大する方針」と答えた。

同センターでは開設以来、3月末までに約150社を訪問し、ヒアリングを実施。外国人材を求める理由として「海外展開も視野に、会社の中核となる人材を採用したい」「中途も含め継続的に採用活動をしているが人材が集まらない」などを挙げる企業が多いという。

18年から、高度外国人材を採用しているタイヤサービス機械製造販売の小野谷機工（本社越前市）ではフィジーやバングラデシュなど4カ国の19人が勤務する。宇田公郎社長は「高い意識を持って働く姿は日本人の刺激にもなる」と期待を寄せる。

同社は今後の海外展開をにらみ外国人材の採用を始めた。「17年にいった海外進出を断念したものの、社員が外国人と働くことを当たり前にする」ことを優先。日本の大学を卒業した外国人材に目を向けるようになった。

フィジー出身のリネル・ラムさん（44）は18年入社。現在はサービス機器一課の上席主任として機械のプログラミングを行う。雇用形態や給与は日本人と変わらず、リネルさんは「どんどんステップアップしたい」と話す。「困難な状況でも粘り強く頑張るのが日本人の尊敬できるところ」と話し、周囲から受ける刺激が自身の成長につながっているという。

機械のプログラミングに携わっているリネルさん＝越前市の小野谷機工

就活様式に違い、戸惑いも

FUKUI外国人材受入サポートセンターの専門相談員を務める中国出身の王梓軒（しおん）さんによると、海外の大学では在学中に企業の内定を獲得することは少ないという。「在学中は勉学がメインとなり、卒業後に独自で就職活動を進めていくのが一般的で、王さんは「日本ならではの就活スタイルを理解していない留学生もいる」と話す。日本の大学側も留学生の採用情報が少なく、十分なサポートができていないケースも少なくないという。

外国人材にも長く働き、キャリアアップしてもらおうと、小野谷機工では、茶道を学んだり、ごみの捨て方などを学んだりする独自のプログラムを展開して、異国での生活に支障が出ないようサポートしている。宇田社長は「支援により外国人材の定着率も上がってきている」と手応えを話す。

同センターでは、高度外国人材を雇用する際に用いられる在留資格などについて説明した企業向けの冊子を製作。担当者は「留学生にとっても企業にとってもスムーズな採用につながるよう支援していきたい」としている。（黒田）

©福井新聞　無断複製・転載を禁じます